

ARCUS

Artist In Residence - IBARAKI

現在のアート・芸術文化を守谷から。

●問合先 アーカススタジオ (もりや学びの里内)
日・月曜日休館 ☎ 46-2600 (10:00 ~ 18:00)
✉ arcus@arcus-project.com
◎詳細な情報はアーカスプロジェクトで検索!

2020年度 アーティスト・イン・レジデンスプログラムがスタート!

今年のアーティスト・イン・レジデンスプログラムは、新型コロナウイルスの感染拡大を受け、アーティストを守谷に招けいせず、オンラインで行います。公募には、日本を含む81カ国・地域から527件の応募があり、審査員に井関悠氏(水戸芸術館現代美術センター学芸員)と徳山拓一氏(森美術館アソシエイト・キュレーター)を迎えて選考を行いました。オンラインで3組のアーティストをご紹介します機会を設けますので、楽しみに待っていてください。

イエヴァ・ラウドウセパ (ラトビア)

ラトビア、リガ生まれ、ロサンゼルス在住。ラトビア大学で哲学を学んだ後、カリフォルニア芸術大学にてアートを学ぶ。ラトビアがソビエト連邦から独立した後に生まれ、共産主義から資本主義への転換期に育ったラウドウセパは、自らと同世代であるソ連崩壊後の最初の世代の若者たちを、主に写真や映像作品で表す。



撮影: Alia Ali

アーカスでは、1972年にアンドレイ・タルコフスキーが制作した映画『惑星ソラリス』に着想を得て、映像作品を制作する予定。『惑星ソラリス』には、未来の都市を象徴するものとして建設されて間もない首都高が映っている。オンラインでの活動では、首都高の建設による東京の変容について調査し、フィクションを織り交ぜた脚本を書く。

ミロナリウ「クロディアナ・ミローナ&ユアン・チュン・リウ」(アルバニア/台湾)

空間デザイナー兼リサーチャーであるクロディアナ・ミローナ(写真左)とユアン・チュン・リウ(写真右)によるロッテルダム在住のデュオ。インテリ・ア・アーキテクチュアを学び、建築を軸にアートやデザインなどの領域でも活動している。



撮影: Pichaya Puapoomcharoen

リウとミローナは、20世紀初め頃に大日本帝国によって台湾にもたらされた米「蓬萊米」について調べる。それは、台湾で育つように改良された米の品種で、当時の政治や技術革新、土地改良などが複雑に絡まり合う中で実現した。

オル太(日本)

2009年に東京で結成された、6人組のアーティスト集団。これまでに、ゲームや祭りなど、特定の地域や社会において見られる集団的な行為とそこで繰り広げられるコミュニケーションに着目し、それらを再編・再演する作品などを手掛けてきた。



撮影: 金川晋吾

アーカスでは、『耕す家』を制作する予定。守谷市内の土地に、ポータブルな母屋とトイレを建て、母屋にはメンバーが入れ替わり住みながら不耕作地を耕し、トイレはコンポストトイレを採用することにより便と生ごみを肥料に変える。自然に対峙するのではなく、自然とともにありながらアーティストも土地も日に日に変化する。その過程は、気候変動やコロナ禍にみまわれる困難な時代において、有益な視点や方法論をもたらしことだろう。

アートカレッジ開講!

昨年好評だった現代アートを分かりやすく読み解くレクチャーシリーズ、アートカレッジを今年も開催します。「地球をもっとよく見る術としてのアート」

人が不可視なものを見ようとする意思是、メディアの発明とテクノロジーの発展により視野の幅と奥行きを広げました。そして、そうした流れの先頭には、いつもアーティストや科学者がいたといってもいいでしょう。1858年には写真家ナダールが空中撮影に成功し、1968年にはアポロ8号の宇宙飛行士が地球の像を捉えます。さらに1970年代には、イームズ夫妻は地球外から分子レベルへと視点を導きました。肉眼では見えないものを見ようとする果てに現れた表現の数々とその背景を探ります。

1500円

※新型コロナウイルスの感染状況により、オンラインでの開催へと変更する可能性があります。

必ず事前にアーカスプロジェクトのウェブサイトからご予約ください。